

九州説と畿内説の邪馬台国論を考える(1)

日本先史古代研究会会員 中島康之

(一)第一の不思議の扉＝「高天原」を思わせる地は筑後川上流の夜須郡

卑弥呼(天照大御神)の都した「高天ノ原」について考えてみよう。それを定めるには古事記上巻に記されている高天ノ原の環境を整理してみる。

- ① 高天ノ原には「天ノ安ノ河」が流れている。その河原には、多くの神々が集まって会議を開くことが出来た。即ち「天ノ安ノ河」は小さな河ではない。
- ② 田が在り、田には畦が在り溝が引かれていた。卑弥呼がその田の新穂を召し上がる祭殿もあった。又「天ノ真名井」と呼ばれる井戸が在り、馬や鶏もいた。すなわち平地が開けていた。
- ③ 「天ノ安ノ河」の河上には「天の岩屋」が在った。そして硬い石や、鉄(天の金山の鉄＝まがね)を採って来ることが出来た。更に「天の岩位＝イワクラ」＝磐座との言葉も表れる。すなわち河上には岩石の在る山があった。

このように「高天ノ原」は著しい地上的特徴をもっている。これらの条件を満たす所を九州に求めることができる。九州に「ヤス」と呼ばれる河、又は、河の辺の地名で「ヤス」と呼ばれる所があるだろうか。……朝倉郡に夜須町と云う町が在る。甘木市の近くである。そしてその地は前述の①～③を満たしている。そして夜須町のすぐ近くを筑後川の支流が流れて居り、川の下流に向けて平野が広がり筑後平野に繋がっている。夜須町は北九州のほぼ中央に位置しており、川の上流には山々が並ぶ、そして夜須(安)川も流れてる。夜須町の「夜須」は日本書紀や万葉集では「安」と記されている。

(二)第二の不思議の扉＝日本神話にあらわれる香山も存在

古事記神話の主な舞台は出雲と九州で占めている。その九州に現在も神話に名の見える「安川」と同じ名の川が流れており「ヤス」の地名が残っている。しかしそれだけではない、「安川」によって不思議の第一の扉が開かれたとすれば「香山」によって不思議の第二の扉が開かれる。日本神話には「天の香山」、記紀では「香具山」は「香山」と記されている。この天の香山は「大和の天の香具山」と考えている人が多い。しかし「香山」と云う山は夜須町や甘木市の近くにも在る。神話の舞台が主に九州である事を考えれば、神話に表れる香山は九州の香山を指すと見るべきであろう。

夜須町や甘木市の東南にある香山は現在「高山」と書かれることが多い。しかし昔は「香山」と書かれた。大和の天の香具山も昔は「高山」と書かれたことがある事は、万葉集の「高山は畝火雄雄し……」etcと詠われている。

地名は時の流れにも滅せず、極めて残りやすいものである。延喜式卷第二十二を見れば、九州地方(西街道)の郡の名として、95郡名が記されている。その内現在も郡の名としてそのまま残っているのは、55郡在る。すなわち 60%近くは千余年以上の歳月にもたえて残っているのである。また「生葉→浮葉 三毛→三池 築城→築上 伊作→伊佐の」ごとく、ごく僅かに変化したものや、昭和の代になって消滅した郡名、更に怡土郡と志麻郡が一緒になって糸島郡に、喜麻郡と穂浪郡が喜穂郡に、三根郡と養父郡と基肆(キイ)郡が一緒になって三養基郡に、飽田郡と託麻郡が一緒になって飽託郡になったように、延喜式の郡名を一部残している現代の郡名を加えるならば、95郡の内 71郡となり約 75%である。更に市町村名が残っているものを加えれば、95郡の内 80郡名が残っているのである。即ち約 84%となる。そして昭和になって消滅した地名も加えるならば、95郡の内、実に 90郡の 95%までもが千余年の年月に逆らって何等かの形

で残っている。言語学の分野では地名は「言語の化石」と言われている。すなわち地名は古い時代の事を探る重要な手掛となる。第一第二の不思議な扉が開かれた。そして更に第三の不思議な扉が前に立っている。

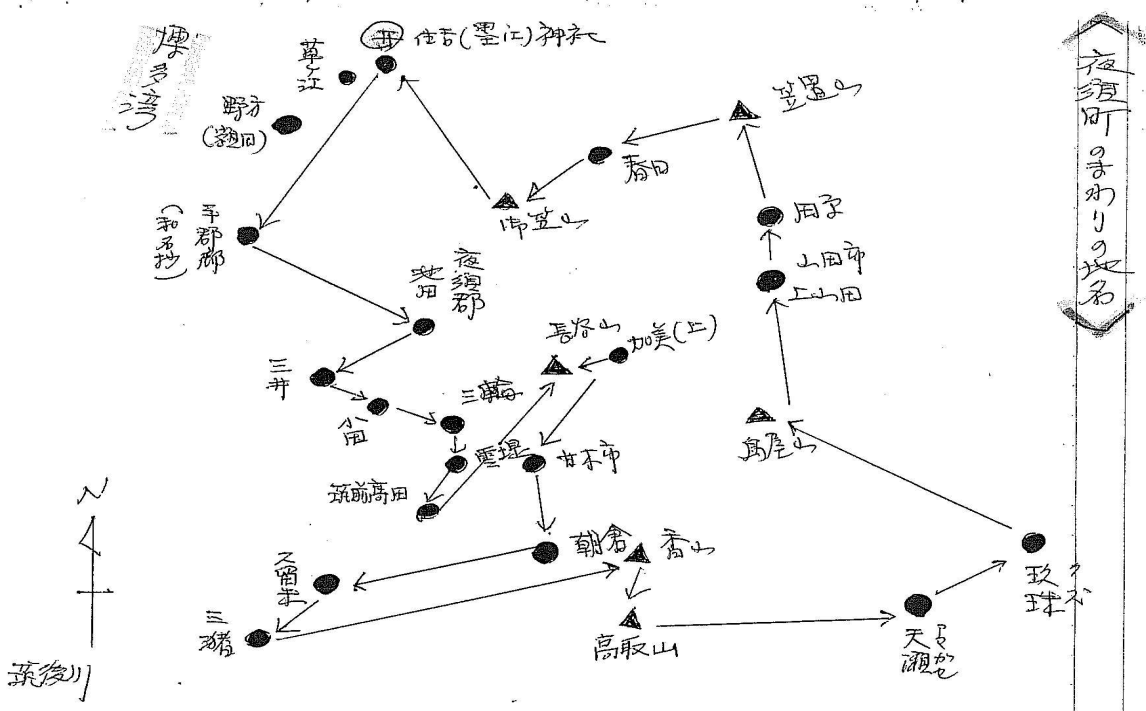
(三)第三の不思議の扉＝九州と近畿との地名の一致

それは「九州と近畿との地名の一致」と言う扉である。地名学者の鏡味完二著「日本ノ地名」によると、九州と近畿との間で、地名の付け方が実によく一致している。似た地名を取り出すことが出来る。これらの地名は何れも大和を中心にしてしている。

海の方へ＝怡土→志麻(九州)・伊勢→志摩(近畿)

山の方へ＝耳納→日田→熊(九州)・美濃→飛騨→熊野(近畿)

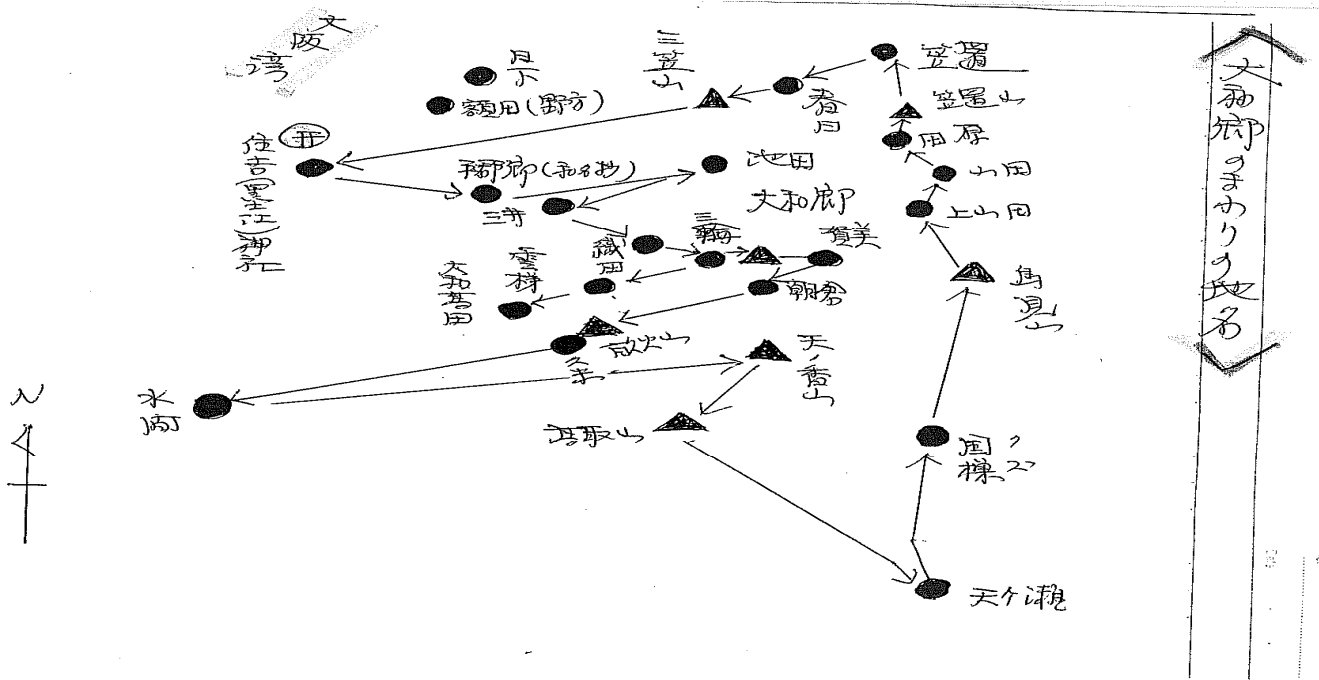
これらの地名配置や地形までも不思議に一致している。たとえば北九州の志賀島の「志賀」と近畿の滋賀県の「滋賀」はどちらも音が「シガ」で、笠置山・三笠山の北に在り、水の近くに在る。以上の指摘は興味のあるものである。北九州と奈良県(大和)の地図を開いて詳しく見ると、次のことに気が付くそれは北九州の夜須町と大和の国の大和郷に驚くほどの地名の一致を見ることが出来る。(下図参照)24 個の地名と発音の一致、相対的位置関係も驚くほど似ている。



九州夜須町のまわりの地名

鏡味完二氏はその著書の中で「民団が移住する場合には、その地名が持つて選ばれた日本の地名には、割合に同種の古代地名が多く、その多い原因が偶然でなく必然的に歴史的順序があつて、持ち運ばれてきた結果となつたもの……と解される」と言う折口信夫氏の見解を引用して次のごとく述べている。

「著者(鏡味完二)はここで、上代の二大文化地域であつた北九州と近畿との間に地名に相通じるものが著しく目立って存在する事実を指摘し、伝うところの神武東征説を暗示する民団の大きい移動にその基因を求めようとする」



奈良県の大和郷の周りの地名

地名についてのこの事実は「邪馬台国東征説」を支持するものである。そして邪馬台国の領域は筑後川のはぼ全域に及んでいたと考える。そうしなければ倭人伝の記するところの戸数七万余個を納める事は出来ない。大陸への通路である奴国や伊都国など玄海灘沿岸にも出やすく、かつ背後に筑後川流域の豊かな生産力と人的資源を擁する、甘木市夜須町の付近こそ女王国卑弥呼の住まいしていた場所として最適であったと考える。

(四)高天ノ原は北九州に在る

天照大御神はどこに居たのか……。古事記・日本書紀には天照御大神は「高天ノ原」に居たと書かれています。古事記の神話に出てくる地名の統計を取ったものは次の通りである。

- 西街道(九州地方) = 36ヶ(29.5%) 山陰道(山陰地方) = 34ヶ(27.9%)
- 南街道(四国・紀伊・淡路) = 13ヶ(10.6%) 畿内(大和・山城・河内・和泉・摂津) = 11ヶ(9%)
- 東山道(近江・美濃・飛騨・信濃・上野・陸奥・出羽) = 9ヶ(7.4%) 倭 = 5ヶ(3.3%)
- 北陸道 = 4ヶ(3.3%) 山陽道 = 4ヶ(3.3%) 東海道 = 3ヶ(2.5%)

古事記神話で圧倒的に多いのは、九州の地名そして出雲の地名であって、奈良大和の地名は極めて僅かである。畿内の地名は11ヶしか出てこない。即ち古事記神話の主たる舞台は九州である。高天ノ原神話は大和朝廷の基となる勢力が、非常に古くは九州に居た時の事を伝承していると思われる。

しかも畿内11ヶの地名もよく見ると、本当に畿内で生まれた地名かどうかは怪しい地名が殆どである。例えば「墨江」と云う地名が神話の中に出てくる。この「墨江」後に「住吉」という字を与えた。その為に今度は文字に引かれて「すみよし」と読むようになった。大阪には現在住吉区が在り住吉神社がある。古事記の神話に出てくる「墨江」はその事であると本居宣長は言っている。畿内地名の一つに統計として取られている住吉神社も福岡博多区に古くから在る神社である。

次号に続編の「間違いだらけの邪馬台国畿内説」を掲載します。力作ですご期待下さい。(編者より)